

がオンライン検索でしたら全国どこからでもアプローチできるけれども、ピンポイントで検索ができるために道草が喰えなくなってしまったという寂しさがあります。たとえばゲーテに『イタリア紀行』という名作がありますが、ゲーテは37歳の時にほとんど誰にも告げずにカールスバートの滞在先から馬車に飛び乗ってイタリアへ向かいます。若い頃からのあこがれの地へ向かいます。その間に見聞きしたこと、それから考えたことを書き綴ったのが『イタリア紀行』ですけれども、あれは駅馬車のスピードでの旅行だからああいうものができるのであって、ドイツからローマまで飛行機で飛んだらああいうものはできません。我々は文学部の中でも特に後ろ向きのことをやっているからかも知れませんが、ああいう馬車のスピードというのが文献検索にも必要ではないかと私は思うのです。ですから、オンライン検索にとっては難しいことかもしれませんが、注文させていただけとしましたら、ネットの海に溺れるという

ようなことがよく言われますが、ネットの海に溺れはせず、しかも意味のある道草を喰えるような、そういったオンライン検索のシステムがソフトの面で考えられないかなと思うのです。我々の場合は一応、紙媒体で育ってまいりましたので、これからオンラインシステムに移行しても両方の形を知っているわけですが、これから来る若い学生諸君は初めからオンラインだけですから、そういった紙媒体の道草の楽しみを味わうことがありません。その辺を補償できるような、そんなものは要らないことかもしれない私だけの郷愁かも知れませんが、そういうことも味わえるような、そういったオンラインシステムというのが考えられればいいなと思っているわけです。本日の電子ジャーナルの話にはほとんど関係ないような話になりましたけれども、文学部の一研究者としてはそういうことを考えております。

(なかつかさ てつろう)

大学における学術情報基盤：情報分野の立場から

京都大学大学院情報学研究科教授 田中克己

情報学研究科の田中です。私は学術情報基盤に対する理系の中の、情報分野の研究者の立場からということと、もう一点は今日のメインのテーマである、大学における基盤的・共通的で本質的な学術資源とは何なのだろうかという観点から話をしたいと思います。

まず研究者の立場から申し上げます。急速な情報化ということで研究室の立場からいきますと、従来は研究室に置く紙による学術雑誌の購入を、少し前からですけどもいっさいやめています。まったく不要であるということです。つまり、研究活動をしていく上での主要な学術雑誌というのはフルアクセスのデジタルライブラリで十分です。情報の分野ではACM、IEEEという学会

のデジタルライブラリが完備しています。年間の学会費とフルアクセスのデジタルライブラリアクセスコストを入れて個人で約200ドルです。そういうサービスになっていますので完全に紙媒体は廃止というような方向にきています。会費を払いますと自動で送られてくる紙の学会誌があります。もう置き場所に困って、整理もしないような状況です。また、これらのフルアクセスのデジタルライブラリが非常に重要なのは、これらが、学会の学会誌や学術論文誌・ジャーナルだけをカバーしているのではないという点です。学会にはその学会で主催される国際会議であるとか、シンポジウムなどが多数ありますが、これらの会議論文集などのコンテンツもフルアクセス可能となっていま

す。これを含んで、学会費とフルアクセスのデジタルライブラリコストをあわせて200ドルであれば、これはもうこちらの方がいいであろうと十分判断できます。また、最近特にカラープリンタが高品質低価格なので、フルアクセスデジタルライブラリが良い点の一つはカラーであることです。自宅でも大学でも、非常に高品質のカラープリンタが安くなりましたので、カラー資料をカラーコピーで取るために図書館に行くという感覚はもう全くないわけです。また、このようなデジタルライブラリの存在は、研究室の研究ミーティングのやり方も変えつつあります。たとえば1〜2時間研究室で研究ミーティングをしている、その時間中にデジタルライブラリにアクセスして書誌情報ではなくコンテンツそのものをとりだして、それを直接学生に読むように指示をつけてメール転送するということをリアルタイムでやっています。非常に便利になったわけですが、一方で図書館という組織を、一種のサービス機構であるとみなした時に、我々は今後、図書館というところにどういうサービスを期待すればいいのかを考えてしまいます。論文検索はサーチエンジンでやればほとんどすんでしまいますし、実は自分自身の論文のアーカイブとか論文のリストを作ってくれる組織もあり、そこを見る方が自分で論文リストを作るよりちゃんとしたものができあがっていたりするわけです。それから自己評価のために自分の論文がどの程度引用されているかというのも、今はWebで、私どもの分野はかなりの精度でアクセスできますので、そうすると図書館に今後何のサービスをお願いすればいいのかなということがあります。次に、組織論ということで、図書館という組織のありかたという話ですが、大学にとって基盤的な学術情報資源というのは一体なんなのだろうか、というお話になってくると思います。その際に、例えば電子ジャーナルであるとか、高額 of 図書であるとか、学位論文程度までは議論があるわけですが、今後、大学はもっと色んな種類の基盤的な学術情報資源が出てくると思います。それは電子化された講義コンテンツであるとか、

それから知財に関わるようなコンテンツもこれから出てくるわけで、そうすると、そういうものまで含めたものに対応する部局というのがありえるのかという話になるかと思います。それからもう一点はやはり中央にそういう集中的な対応部局を用意するのか、それとも専攻部局、研究室、ひいては個人でどうバランスをとって対応するのかという問題が大きいと思います。また、予算に関しても、たとえば法人化がもたらしたグッドニュースということであれば、運営交付金が、今年度からずいぶん従来の費目が変わりまして使いやすくなっています。ですから、極端な場合、全て運営交付金の物件費を図書購入にあててもいいというわけで、それは本当ある意味でグッドニュースなのかもしれません。それからもう一点はやはり外部資金に関する間接経費です。使途の制限とかもあるようですが、これをこういう全学の学術情報資源というところにどういうかたちで使っていくかということが、非常に大事なポイントではないかと思っています。

次に、日本発の学術論文誌を電子ジャーナルできちんとやらなければいけないという議論についてです。ただ、これに対しては、理工系でも分野によって随分、温度差があります。電気系の分野というのはわが国の技術というのを日本発の電子ジャーナルできちんとやろうという傾向がきわめて強いのですが、実は情報系の分野はあまりそういう感覚はありません。なぜかと言いますと、情報分野では、日本の学会が英文論文誌というのをずいぶん過去にもやりましたが、残念ながら、ことごとく失敗をしており、サーキュレーションが極めて低いのです。海外にまったくサーキュレートしていかないのです。ビジネスモデルの失敗だと思います。やはり研究者というのは定評のある評価の高い学術論文誌に投稿するわけで、そこのジレンマが大きな問題だと思うのです。

研究者の立場からもう一点申し上げたいのは、全学共通的な大学の学術情報基盤のあり方です。大学の基盤的な学術情報資源で、基盤的というのは全学共通的にサポートすべきものであるという意

味であえて基盤的という言葉を使っております。今日は図書館を中心とした基盤的な学術情報資源ということで、京大の中で、電子ジャーナル、データベース、大型コレクション、遡及入力、こういうものをやはり総括的に包括的に基盤的なものとして位置付けるべきであるという議論が出てきております。これに対して、個々の負担論を申しますと色んな議論が出てくるわけです。私どもの部局は、電子ジャーナルは使わないが大型コレクションは少しあるとか、遡及入力の必要な図書はたくさんあるのだけでも電子ジャーナルは全く使わないといったような議論です。これも分野によっていぶん差があるわけですが、やはりそれを個々の都合で言うのではなくて全体として、たとえばこちらではこれは余り使わないけれどこちらは使うのだというふうな、重み付けを含めて包括的にこれを基盤的なものだという位置付けをしないといけないのではないかと思います。

もう一点は、先程申し上げましたように、これまであまり議論されていない新しい基盤的な学術情報資源です。たとえば講義コンテンツとか電子ブックというのがこれから出て来るわけで、昨今ではもうご承知のとおり、講義のコンテンツは非常に高品質なものは別として、簡単に実は作成ができます。たとえばパワーポイントを使って知財に関する講演をしていただき、講演が終わった瞬間に、パワーポイント資料と講師の映像・音声とが同期した形の講義コンテンツができあがります。そういうツールはもうたくさん出ています。そうすると後はこれの著作権管理であるとか編集ということになりますが、こういうコンテンツは一体どこが責任をもって大学の中で扱うのでしょうか。



講義の電子コンテンツ問題がこれから非常に重要になってくるのではないかと思います。特にこういう講義の電子コンテンツを学外に発信するという話が出て来ますと、これは大学の経営に関わるような非常に貴重な学術情報資源になります。さらに、元々がデジタルであるコンテンツというのも大学にはたくさんあります。これも非常に大きな問題だと思っていますけれども、京都大学として公開をしている、たとえばウェブのページのアーカイブ、こういうもののアーカイブは一体誰が責任を持って維持管理するのでしょうか。ここまで基盤的情報資源の範囲を広げますとこれは図書館という現状の組織の枠をはるかに越えてしまうわけで、そうすると組織論というのは非常にこれから大事な話になってくるだろうと考えています。

宣伝をする訳でもございませんが、京都大学の図書館は、机の上に京都大学というキャッチフレーズで電子図書館を開発されてきております。これは数年前になるとお聞きしておりますけれども、貴重資料であるとか電子テキストであるとか学位論文論題一覧といった、自前のコンテンツを作るということをやってきました。私が好きで良く見ておりますのは、たまたまですが今年は新撰組なので、当時の非常に貴重な画像とか資料を見ております。

大学の基盤的な学術情報資源というのは一体何なのだろうかということをやったり今もう一度、そこから議論をしないと、この広がりに対して図書館だけで対処できるのかという話も含めて、近々の問題になっているのではないかという問題意識を持っています。

(たなか かつみ)

